

ボランティアキャンペーン事業

1. みんなでボランティア（以下、みなボラ）体験ツアー

みなボラ班学生スタッフ：今西、梅田、河南、木山、中山、古川、藤井、村松

実施回数：4月、5月、6月、11月・・・計4回

各ツアー詳細

4月 つなごうこどもフェスタ2004

主催者：(特活) 山科醍醐こども広場

日時：2004年4月24日（土曜）10：30～15：00

場所：東御坊境内

担当者：村松

活動内容：会場設営、模擬店・フリーマーケット商品の販売、会場案内が主な活動

参加者内訳

文	経済	経営	法	短期	理工	社会	国際	その他	スタッフ	合計
0	4	0	3	0	0	2	3	5	7	25

感想：みなボラが始まって以来、参加人数が最高記録25名を記録しました。子供達とたくさん触れ合うことができ、子供達は非常に元気で、楽しく、常に笑って活動できました。また企画して欲しいという要望が多くありました！！

5月 グラウンドソフトボール大会

主催者：京都府視覚障害者協会

日時：2004年5月23日（日）9：00～17：30

場所：宇治市立東宇治中学校

担当者：木山

活動内容：ボールボーイ（場外に出たボールを拾う係）、場内整理、場内案内

参加者内訳

文	経済	経営	法	短期	理工	社会	国際	その他	スタッフ	合計
2	2	0	1	5	0	2	0	0	4	16

感想：視覚障害者の方とのコミュニケーションが少なく、参加する前は、もっと交流できると思って参加した参加者がほとんどでした。団体との打ち合わせの段階で参加者が何をできるのかを明確にしていかなければならないと感じました。

6月 保育所での保育体験

主催者：京都市砂川保育所

日時：2004年6月22日

場所：砂川保育所

担当者：木山

活動内容：園児の親を対象にした講演会の間、1歳～5歳までの園児と元気よく遊んだ。

参加者内訳

文	経済	経営	法	短期	理工	社会	国際	その他	スタッフ	合計
0	0	0	0	6	0	0	0	0	2	8

感想：たくさんの子供たちと元気に遊ぶことができました。保母さんを目指している人はオススメのみなボラでした。子供の元気の良さに注意!!

11月 第6回はるの里まつり

主催者：小規模通所授産施設はるの里

日時：2004年11月27日（土）9：30～16：00

場所：はるの里

担当者：河南

活動内容：はるの里祭りのお手伝い（バザー、屋台等のお手伝い）

参加者内訳

文	経済	経営	法	短期	理工	社会	国際	その他	スタッフ	合計
0	0	3	1	1	0	0	0	0	5	10

感想：初めはみなボラ参加者も緊張からか積極的な感じは見られなかった。しかし、時間が立つと、自分から手伝ったり、職員さんに質問したりと、参加者全員がとてもいきいきとした表情で活動していました。ただ、施設の利用者さんたちと触れ合うことがなかったため、福祉のボランティアとしてはもの足りないという意見もありました。

2004年度振り返り

みなボラも2年目を向かえ、学生スタッフの人数も増え、より良いツアーが企画できるようになりました。ただ、二年目を迎えて反省することもありました。

参加者の満足度

大変良かった	10
良かった	7
普通	2
あまり良くなかった	0
良くなかった	0

参加者の多くが良かったと答えてくれました。実際に参加してくれた学生のみなさんはとてもいい表情で活動してくれました。企画した僕たちも、参加者の方が楽しんでくれている様子を見ると、ほんとにこのツアーを企画してよかったと思います。

また参加理由として、1度ボランティアに参加、経験してみたかったという学生がほとんどで、みなボラのようなツアーは、ボランティア活動を始める最初の一歩として大学のボランティアセンターには必要だと思いました。

参加者の要望

参加者の方から、どんなツアーに興味がありますか？と聞いたところ、1位「子供関係」2位「環境」3位「NPOの見学」4位「海外ボランティア」というような意見がありました。海外でのボランティアというのは、難しいかもしれませんが、環境やNPOに興味のある学生が多いので、2005年度は環境に関するツアーやNPOの見学ツアーなども企画できた

らと考えています。

反省点

① 広報

どこでみなボラッアを知りましたか？

知人	7
チラシ	4
授業	0
NPOセンター	10
メルマガ	1

4月にみなボラ始まって以来の参加人数になりましたが、参加人数が少ない月もありました。アンケートでも、授業やメルマガでの広報で参加した学生は少なく、広報の仕方については反省する点が多かったです。もっと多くの学生に参加してもらうためには、工夫が足らなかったと思います。

② 実施回数

2004年度は4回しか企画することができなかつたのが大きな反省点です。学生スタッフの役割分担が明確ではなかつたため、企画段階から非常に効率が悪かつたように思います。学生スタッフ同士のコミュニケーションの悪さもあり、結果4回しか行えませんでした。2005年度は、より良いツアーをより多く企画していきたいです!!

報告者：古川 洋一郎

2. 大学ボランティアセンター合同交流会

担当者：藪

実施日時：6月27日（日）

開場 13：30

第1部 14：00～17：30

第2部 18：30～20：30

実施場所：第1部 龍谷大学深草学舎 4号館511～513

第2部 龍谷大学深草学舎 4号館地下ラウンジ

〈参加大学〉

佛教大学ボランティア室（佛教大学）

関西学院ヒューマンサービスセンター（関西学院大学）

文教大学ボランティアセンター（文教大学）

龍谷大学ボランティア・NPO活動センター

〈参加者内わけ〉

学外（17名）

佛教大学…沢田、西村、松本、福井

関西学院大学…林、山本、片桐、新田、高松、推尼、龍、黒田、近藤

京都文教大学…熊崎、吉房、市川、松山

学内（22名）

龍谷大学（瀬田）…国実、平木、伊藤、谷口、巽、甲浦
 龍谷大学（深草）…藤井、熊澤、大西、岩尾、加来、橋本、村松、藪、梅田、古川、佐々木（健）、坂口、吉村、塩見、山河、徳山
 （計39名）

目的・活動報告：

4 大学交流会は、各大学のボランティアセンターで活動している学生スタッフが意見を交換し合い、交流を深めることを目的として開催された。ボランティアセンターは大学によって設立経緯や運営体制が異なる。各ボランティアセンターの背景や、スタッフの経験に基づいた意見を交換し合うことで、これからの活動に役立つような多くの刺激を得る機会になると考え、開催した。

交流会当日は、殆どが初めて顔を会わせた者同士であったが、ボランティアセンターの学生スタッフであるという共通点から会話が派生していき、会終了時には緊張も解れ、打ち解けた様子であった。交流会によって、今後につながるネットワークの基となる各ボランティアセンター・学生スタッフ同士のつながりが出来た。

内 容：

第1部

時 間	場 所	内 容	備 考
13：30～	513	開場	
14：00～14：05	513	開会の挨拶	全体
14：05～14：25	513	アイスブレイク—自己紹介ゲーム	班ごと
14：25～14：50	513	ボランティアセンター紹介（5分×5）	全体
14：50～15：50	A・B班→513 C・D班→512	『大学にあるボランティアセンターの役割ってなんだろう』—KJ法【作業】	班ごと
15：50～16：30	”	『 〃 』【まとめ&休憩】	班ごと
16：30～17：00	513	『 〃 』【発表】	全体
17：00～17：30	”	テーマグループトーク『このつながりを今後どう活かしていきたいか？』	班ごと

第2部

4号館地下ラウンジ

- 18：00～18：05 あいさつ
- 18：05～20：00 自由時間

報告者：藪 有理子

3. やったろう関西2005

企 画 名：やったろう関西2005 ～学生の学生による学生のためのつながり作り～

実施日時：2005年3月21日 月曜日（祝）

目 的：

昨年行なった大学ボランティアセンター交流会の第二回目として前任者から引き継いだ。普段なかなか交流する機会のない他大学の学生スタッフとの交流会は画期的であり、好評

のうちに終了したことをうけて今年度も実施するに至った。今回はより発展的な内容として実際に企画案を作る試みを加えた。

場 所：龍谷大学深草学舎4号館地下食堂

参加者：・龍谷大学

・関西学院大学

・神戸大学

・立命館大学

・仏教大学

・京都産業大学

でスタッフとして活動するスタッフ約30人

内 容：

関西でおもしろいことしよう！をテーマに大学をシャッフルしたメンバーで実際に企画案を作った。6チームそれぞれにファシリテーターを置き、5w1hの基本構造に基づいて企画を組み立てた。さらに各大学の活動報告では、私たちは災害ボランティアでの実績を強くアピールした。二部構成で立食パーティーも行ない、終始活気に溢れた中でと進めることができた。

ま と め：

シャッフルされたメンバーからは斬新な案も出され大学内ではマンネリ化してくる企画もディスカッションを重ね、「おもしろく」なっていった。そして関西において共同で企画を主催する可能性を実証できたことは収穫であった。

今後は（仮称）関西ピーススチューデントネットワークという緩やかなネットワークを創設し、関西エリアに「おもしろい」企画を発信して行こうという流れである。

今後も継続して運営していきたいイベントである。

報告者：大槻 知英

4. 龍谷祭参加・沖縄パネル展

実施日時：2004年10月30日（土）～31日（日）

場 所：龍谷大学瀬田学舎 学生交流会館

目 的：8月に実施した沖縄国内研修で見、感じたことを、一般学生に発信し、共に考えていこうという考えのもと龍谷祭のパネル展部門に参加

担 当 者：濱門、大月、国実、甲浦、宇多村、村上、伊藤、津地、村上

来 訪 者：計102人（学内生・一般含む）

内 容：

沖縄研修合宿に参加した私たち学生スタッフは、研修合宿で見たり、感じたことを一般学生に伝え、共に沖縄について考える契機にしていこうと思い、龍谷祭に参加しました。

龍谷祭では、研修合宿の際に撮った写真をパネルにし、そこに文章を加え来訪者の方に紹介しました。紹介した内容は、研修合宿で感じたことを学生スタッフが思い思いの形で伝えました。

戦後といわれている今日でも、沖縄には米軍基地がまだまだ存在しています。米軍基地にいる米軍が犯す犯罪、米軍基地から飛び立った航空機が沖縄の民間人宅に墜落、米軍基地

による環境破壊など問題が複雑に絡み合っている現状。その中で自分達に何が出来るのかと自問自答しながら、パネルの説明をしました。そこで、まだ沖縄のことを知らない方に情報を発信するのも一つのアプローチではないかと考え、パネル展を実施しました。

パネル展を終えた後に、ある来訪者の方に「がんばって下さい」と言われました。まだ沖縄の現状を知らない一般の方にも一緒に考えていこうという考えのもとにパネル展を実施していたのですが、その来訪者の方には、自分達にはあまり関係のない問題として捉えられているのか、それとも自分自身何が出来るのかわからないのか、だからあのようにおっしゃったのかと思いました。思い返せば、ただ単にパネル展を行っただけなので、来訪者の方が考える契機を作れるような形のワークショップ型のパネル展にすれば良かったと今更ながら思いました。

パネル展をすることは簡単なようで、とても難しいものだとは今回のパネル展から学ぶことが出来ました。また今回は準備不足で、アンケート等を作成出来なかったのが、来訪者の思いを聞けませんでした。次回からはそのようなことにはないように行いたいと思います。

報告者：濱門 正樹

5. 第13回 全国ボランティアフェスティバルびわこ

第16分科会 湧き出せ！学生マジック!!～大学ボランティアセンターができること～

担当者：蓮井、谷口、巽、那須、平木、小林、国実

実施日時：2004年9月25日（土）・26日（日）

実施場所：龍谷大学瀬田学舎 青志館2階 談話室

参加者：学生12名、社会福祉協議会職員13名、学校教職員3名

ボランティア支援従事者（社協除く）4名、ボランティア受入れ側7名

一般、その他8名

（合計47名）

活動報告：

第一部 パネルディスカッション・グループトーク

〈パネルディスカッション〉

パネラー：大島 隆代 明治学院大学専任コーディネーター

藪 有理子 龍谷大学ボランティア・NPO活動センター学生スタッフ

今井 治 SVネット事務局長

コメンテーター：赤澤清孝 NPO法人きょうとNPOセンター事務局長

コーディネーター：谷口正恵 龍谷大学ボランティア・NPO活動センター学生スタッフ

藪さんは、龍谷大学が行っている「みなボラ」（初めてボランティア活動を行う学生を対象とした、集団で行うボランティア一日体験）を例に挙げ、「学生のボランティア活動を促進するには、ただ情報収集を徹底するだけでは不十分である。」「学生が求めているニーズ把握が大切で、他大学との横のつながり、地域との連携は欠かせないものである。」という意見を述べた。また、大島氏は、専任コーディネーターという立場から、(株)ソニーとの連携で行った活動や、戸塚祭りや地域わくわく交流祭で地域住民と行った協働事業の経験より、学生スタッフに求めるものや、学生と活動する楽しさ、難しさについてコメン

トされた。今井氏は、東京SVネットという、様々な大学でボランティアを行う学生間の組織が設立されるまでの経緯を踏まえ、メーリングリストなどによる意見交換を通じた横の関係作りの重要性について述べた。

〈グループトーク内〉

全体を9グループに分け、各グループにファシリテーターと書記を一名ずつ置いた。グループ内で簡単な自己紹介の後、パネルディスカッションの感想、参加者が今後学生の力をどのように生かせると思ったか等を自由に話し合ってもらった。その後、各グループで出た意見を発表し、パネラーやコメンテーターよりコメントをいただいた。

第二部 グループディスカッション

「私たちの大学ボランティアセンターを作ってみよう！」をテーマに、KJ法を用いてグループで一つの架空のボランティアセンター作りを行った。参加者からは、「学生や地域でボランティアをしている人、学校の教職員など様々な立場や世代の意見が聞けて面白かった」「仮のボランティアセンターをつくることで、設立後の活動への期待と同時に活動上の問題点もリアルに感じた。今後活かしたい」といった意見や感想がでた。



(グループディスカッションにてボランティアセンターの未来を議論する学生と、地域の人々)

まとめ・感想：

大学ボランティアセンターの学生スタッフやセンターを立ち上げたい学生・大学教職員、社協職員、福祉施設職員・利用者等、様々な立場、年代層の方の参加を得ることができた。このことにより、私たち学生の考えのみでなく、地域の方の思いや意見を知ることができた。さらに、私たちの思いや活動を地域の方に知ってもらうことができたと思う。「学生にとって」「地域にとって」だけでは大学ボランティアセンターは長続きしない。大学という教育の場を活かしながら、いろいろな立場の人とボランティアセンターを創り上げていくことが大学ボランティアセンターの醍醐味であるということを、参加者、センタースタッフ共に感じる事ができた。

また、この企画は、学生スタッフで企画から準備、運営まで行う初めての大きなイベントであった。そのため、何もかもが手探りでなかなか前に進むことができなかった。それでも、成功させたいという思いで担当スタッフを中心に準備に取り組み、多くの参加者からおもしろかったという感想をいただいた。反省は多々あるものの、一つの大きなイベントをやり遂げたことの達成感を得ることができた。今回の経験は、学生スタッフにとって今後の自信につながると思う。自信と同時に、反省点を活かし、学生からも地域からも必要とされるNPOセンターを創っていきたい。

報告者：国実 紗登美

6. みんなでつくろう!!～SOトーチラン滋賀INおおつ～

企画名：みんなでつくろう!!!～SOトーチラン滋賀INおおつ～

担当者：上原・藤本・本間・伊藤・平木

実施日時：2004年11月21日（日） 11：00～14：00

実施場所：大津市におの浜一円

参加者：龍谷大学生約50人（担当者5人含む）

社会（31）

国際（15）

理工（4） 計50人

目的：2005年スペシャルオリンピックス世界大会への理解促進と認知向上のために、滋賀県で行われた聖火リレー（＝10,000人トーチラン滋賀）に龍谷大学生が関わることによって、学生に考えるきっかけや地域の活動に触れる機会を提供する。

概要：①トーチランナーの随走者として龍大生チームを作り、第2区を一緒に走る。
②ゴール地点の打出の森での閉会イベント（会場設営・豚汁配布・ゴールの雰囲気作り・沖縄三線演奏←龍谷大学サークル「うみんちゅ」）に関わる。

内容：

まず膳所駅に早朝7：30、担当者（5人）とゴール地点ボランティアチーム（5人）が集めた。そのまま、におの浜ふれあいスポーツセンターまで歩き、当日のイベントの動きを確認した。そこから★随走者チーム（藤本・本間）、★トーチランナーがもつトーチ配達人のニンニン部隊（伊藤・平木）と★ゴール地点ボランティアチーム（6人、上原含む）に分かれ、それぞれの持ち場に向かった。

随走者チームは10：00に一般学生の随走者たちを再び膳所駅まで迎えに行き、二区スタート地点である大津プリンスから、一区のトーチを受けてスタート。

と、同時にニンニン部隊のトーチ運びも始まった。10,000人トーチラン滋賀実行委員の方のはからいにより、希望者は2区だけでなく最後まで走っても良いということだったので、随走者として参加した約45名のうちほとんどが、2区～10区の4.5キロを完走して12：30頃ゴールを迎えた。

ゴール地点ボランティアチームは、9：00にゴール地点の打出の森に到着してから12：30頃まで、ランナーたちの心に残るゴールを作り上げるべく、力いっぱい動いた。地域の方、学生みんなが力を合わせてがんばった結果、何もない広場だった打出の森にステージが出来、テントがたち、豚汁配布コーナーや物販コーナーが出来た。龍谷祭実行委員会の方々に貸していただいたパネルや横断幕、空き缶で作った巨大オブジェは、会場を華やかにするのにとても助かった。ゴールの後、参加者全員が豚汁とおにぎりを楽しむ中、龍谷大学サークルのうみんちゅさんが披露してくださった、三線の音色やエイサーの掛け声が場をより華やかなものにしていった。

参加者からは「面白かった」「障がいを持つ人への見方が少し変わった」「またこのような企画をやって欲しい」など、この企画が大成功であったことを感じさせる意見や感想が

多く得られた。龍谷祭実行委員会の方やうみんちゅさんにも喜んでもらえたようである。



みんなで大津の町を駆け抜けろ!!

まとめ・感想：

今回の企画は、いろんな立場の人に様々な発見や影響を与えた。参加者にはねらい通り、学生に考えるきっかけや地域の活動に触れる機会を提供することが出来たと思うし、龍谷祭実行委員会の方やうみんちゅさんには「活動の畑は違うけれど、このような関わり方、つながり方もあるんだ」という可能性も提案できた。地域の方にも学生パワーを感じてもらえたと思う。企画の段階から地域の方と一緒にやっていく中で、企画の捉え方の違いなどで大変だった部分もあるが、本当にやってよかったと思う。

しかし、発見したのは良いものばかりではなかった。いったん企画に関わると、それが終わるまで目が回るほど忙しくなる。担当者の中には学業や自分の時間に大きな影響が出た者もいる。“自発的に”始めたはずだったのに、気がつけば大きな責任が両方の肩にかかっていた。

ひとつの企画を実行に移すまでには、大変な労力を要する。だからこそ企画を立ち上げるときには、「なぜ自分たちはこの企画を実行したいのか」という目的意識をしっかり明確にしておくことが重要だと感じた。

報告者：上原 重子

7. 「トーチラン写真展」

企画名：トーチラン写真展

担当者：上原・藤本・本間

実施日時：2005年12月14日（火）10：00～15：00

15日（水）10：00～15：00

16日（木）10：00～17：00

実施場所：龍谷大学瀬田学舎 学生交流会館 1F

三角コーナー

参加者：龍谷大学生47名

一般の方 4名 計53名

目的：

①2004年11月21日（日）の「みんなで作ろう!!!～SOトーチラン滋賀INおおつ～」の参加者に向けて、参加者自身が関わっていなかったところも含めてイベント全体の様子を知ってもらおう。



②参加していなかった一般学生に向けて、このようなイベントがあったということを知らせるとともに、2005年スペシャルオリンピックス世界大会への認知向上をはかる。

内 容：

三日間毎朝10:00に、事前に作成したアンケート用紙・筆記用具・「みんなでつくろう!!!～SOトーチラン滋賀INおおつ～」で実際に使用したトーチランTシャツやバンダナ・ベストなどを持って交流会館に行き、閉展時間まで担当者やNPOセンターの学生スタッフと交代しながら写真展を開いた。授業期間中だったのにも関わらず、3日間で12月21日のトーチランに参加してくれた学生のほとんどが写真展を見に来てくれた。みんな自分たちが写っている写真を楽しそうに探したり、担当者と話したりしてくれた。その他にもトーチランに参加していない学生や、通りすがりの方も数人足を止め、興味深く見ていってくれた。

活動報告・発見：

アンケートには、トーチランの参加者からは「面白かった」という声が多く見られた。そこは狙い通りだった。しかしそんな中でこの様な一般学生からの声があった。「みんな面白そうだった。参加してみたかった。」まさかこの様なリアクションが返ってくるとは思わなかった。写真展とはいえ用意をするのはとても大変だったけれど、これを開いたことによってこの様なボランティアへのきっかけ作りも出来るのだ、ということが発見できて企画者側もうれしい気持ちでいっぱいになった。

自分たちが何らかのアクションを起こすと、必ず何かに影響を与える。「形にしてみる」ということの大切さを学んだ今回の写真展だった。

報告者：上原 重子

8. フェアトレード商品販売会

10月28日に実施した「大人と子どもの関係性を考える～バングラディッシュの事例から～」の講演会に関連づけ、講師の所属団体、(特活) シャプラニール=市民による海外協力の会の扱うフェアトレード商品の販売会を行った。物品を販売することにより、実物に触れ、南アジアで生きる人々の生活の理解を促進すると共にその収益を送るため購入可能な機会を作る事を目的に実施した。

期 間：2004年10月21日（木）～11月4日（木）

場 所：龍谷大学ボランティア・NPO活動センター（瀬田）内

商 品：ブックカバー・筆箱などの文具品、アクセサリ・ハンカチ等小物、カバンなどネパール・バングラディッシュの手工芸品。

販売方法：

「(特活) シャプラニール=市民による海外協力の会」の扱うクラフトリンク商品の委託販売。センター内に商品を展示し販売した。売上金は全額(特活) シャプラニール=市民による海外協力の会へ寄付。

売 上 金：¥28,690

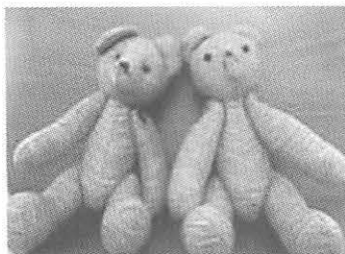
購 買 者：学生・教職員 約50名



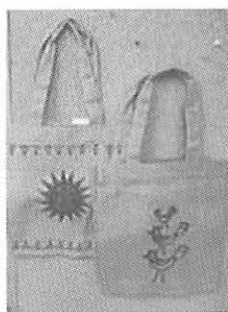
振り返って：

講演会の相乗効果を求めて行った企画であったが、講演会とは関係なくフェアトレード商品に関心のある多くの学生その他、教職員の方々までも購入に来て下さりNPOセンターの認知度が上がったと思われる。広報活動として、立て看板やポスター掲示の他、学生スタッフが手分けし様々な授業で宣伝をした。結果、普段あまりNPOセンターを訪れない理工学部の学生の来室が目立った。

販売期間後も、学生や教職員から商品購入希望の問い合わせがある。現在は、商品の取り扱い店の紹介を行っているほか、NPOセンターのラックにフェアトレード商品カタログコーナーをつくり自由に閲覧できる状態である。来年はより学生のニーズを取り入れた形で販売会が行えたらいいと思う。ボランティアに関心のない学生や「実際に活動しなければ国際協力でない」と感じる学生が多い中、フェアトレード商品を通して自分たちの出来ることの考えられる機会を提供していきたい。



手織り麻のぬいぐるみ



ジュートで作られたバッグ

報告者：伊藤 智士

9. まちづくりボランティア～大津祭～

企画名：まちづくりボランティア～大津祭～

担当者：宇多村、細谷、村上、津地、太田、甲浦

日時：【オリエンテーション】9月25日、15時～18時

【出店ボランティア】10月9日16時～22時

【出店・銚曳ボランティア】10日、10時～16時

場所：【オリエンテーション】大津市円屋町商店街 大津の町屋を考える会

【出店ボランティア】9日、丸屋町 町のオアシス周辺

【出店ボランティア】10日、中央通りNTT docomo付近

【銚曳ボランティア】10日、6時JR大津駅

参加者：学生スタッフ（担当者を含む）9人（国際4・社会4・理工1）、一般学生17人
目的：

大津祭に参加することをきっかけとして、瀬田学舎からも近い大津の現状を知り、地域の方々との交流の中で、大津の町屋や文化再生について学ぶ、引き手ボランティアは男性だけの参加になってしまうため、女性も祭りに参加してもらう機会をつくるための企画。より大津の町についてよく知ってもらえるよう「曳山連盟」さん、「町のオアシス」さんという町の団体機関の方々と共同で行う。

概要：

【出店ボランティア】

・10月9日、10日に売る粽ののし・おみくじ付け、宵宮の祭りの出店（金魚すくい・綿菓子・ポップコーン）の手伝い・オリジナル弁当・粽の販売、曳山見学席の受付（2人）

【銚曳ボランティア】

・10月10日 銚曳 大津市内を練り歩き、観光客や地元の方々と触れ合う

活動報告：

9月25日 【オリエンテーション】3時間程で大津祭での当日の動き、町内説明を「大津曳山連盟」さんにしていただき、町内を散策して歩き大津の文化や現在抱える問題についてのセミナーを「大津の町屋を考える会」さんに開いていただきました。参加して下さった学生からは「日頃何気なく通っている町にこれ程の魅力があるなんて驚いた」などの感想が聞かれました。

9日 【出店ボランティア】大津駅前に16時に集合し、町のオアシスに向かうまでに、大津の町を福井さん（町のオアシスの責任者）に案内してもらった。所々の家からくり人形が飾ってあり、町を歩く私たちをかなり楽しませてくれた。曳山も組み立てて道に置いてあったので、間近でじっくり見物することができた。町のオアシス到着後は、町の高齢者の方々と一緒に粽ののし・おみくじ付けをした。18時からは神社のハッピを着て金魚すくい・綿菓子・ポップコーンの出店を2、3人ずつに分かれて手伝った。特にポップコーンも綿菓子も100円という破格の値段のせいもあって行列が絶えなかった。私は綿菓子を担当し、おかげで綿菓子作りがかなりうまくなった。人数が足りていたため前半・後半というふうに分けて担当をつけたので、前半の人が店についているときは、後半の人は神社

でたくさん出店が出ていたので、自由行動にした。22時には後片付けも含め終了した。

10日 【曳手ボランティア】 大津祭当日では、8時間にわたって大津市内をねり歩いた。その途中では、観光客の方や、大津市内の方々と触れ合った。参加した学生も掛け声を出し合い、祭を盛り上げることが出来たと思う。

以上の様に、祭とオリエンテーションも含め3日間は当初の企画目的を達成できたのではないかと思う。参加学生からも各団体さんからも次回参加企画を望む声が聞かれるなど、目的以上に学生一人一人へボランティアへの取り組みの楽しさや喜びを発見してもらえ、機会になったと思う。

元気に鉾を引く学生。休憩の合間にハイ！チーズ♪



10日 【出店ボランティア】 大津駅に10時に集合。町はすっかり祭りの雰囲気だった。町のオアシスに弁当・粽の販売準備のため向かうと、町のオアシスの斜めの店で小学生がアイデアを出し合って作り上げた、大津ティーンズ商人道という店の準備を行っていた。そして、その手助けをしている町の商店街の人たちに、この店についてや、町の商店街のいいところなどの話を聞いた。10時半ごろには販売場所に到着し、看板の貼り付け、商品を並べたりと11時の開店までの準備を行った。予定外のこととして弁当の到着が遅れたため、販売開始時間が少し遅れてしまった。途中、曳山連盟さんから曳山見学席の受付を頼まれていたため、学生スタッフの2人（宇多村・村上）はそちらに向かった。16時まで販売を行った。みんな声がかれるくらい大きな声で客寄せをしたので、終わるころにはみんなかなり疲れていたが、自然と和気あいあいとしていてよい雰囲気ができていた。残念なことに一般学生のかたの財布の盗難がおこってしまった。このことを教訓として貴重品管理を徹底してもらおうよう、参加者に呼びかけていきたいと思った。お弁当・粽は若干売れ残ってしまったが、今回はじめての試みにしては、上出来だった。

報告者：宇多村 侑加・甲浦 翔太